

「ほんなん」 しています。

わだいのこうけん

粉河町北長田地区

紀の川市旧粉河町北長田地区の水源である桜池は、江戸初期に幕府直營で築造された由緒あるため池。工事のために紀北、紀中から集められた人足は3年間で42万人余という大事業でした。周辺にも相次いでため池が作られ、現在和歌山県内には5000以上のため池が存在しますが紀の川筋に集中し、桜池は歴史の古さも貯水量もトップクラス。和歌山の穀倉地帯と誇るほどに発達した紀の川平野の農業を支えてきた重要な水源です。

こうした農業生産のため開拓史を持つ北長田地区ですが、高齢化のため農業の存続が危機的な状況です。今や全国の耕作放棄地は耕地面積の10%にもなり年々増加。農業離れが止まりません。また、ほとんど農業がなされていない田畑もあります。このような遊休農地は急いで手を打たないと高い確率で耕作放棄地となっていくま。

北長田地域資源保全会は、高齢化のため維持が困難になった池や水路、農地の保全や若手就農者の育成に取り組んでいきます。北長田集落は現在69

再生畑ねぎ玉

戸。そのほとんどが「農家」とはいえ、農家構成の実態は70〜80歳代がほとんど。集落の農地は30畝。ここに5人の若手専業農家がいれば維持できる見込みで、その「難問」解決のための仕組みづくりに取り組んでいるのです。

その一つが遊休農地の再生。先日、保全会が取り組む農地再生現場で、筆者が担当する農業実習の授業を行いました。

玉ねぎ畑に再生

現場は元パイプハウスでイチゴ生産をしていた2反ほどの農地。周辺には特産の柿畑があり、このまま放棄されるには惜しい空間です。農地としてよみがえるには人工物を取り除き土の整備、その後、田植え時期に水を引き代かき、夏場に乾かし、肥料まき、畝立て、晩秋に定植、来年の5月

ごろから収穫とのこと。学生らは保全会の取り組みを座学で学んだ後、雨上がりでぬかるんだ農地に入り、ハウスを撤去後のビニールや金属、コンクリート片などの細かい資材の残骸拾いや水路の溝さらえなど、地味な作業に泥まみれになりながら励みました。

紀の川平野は全国でも有数のタマネギの産地でした。かつては海外輸出を試みたり出荷拠点の岩出駅がタマネギで満杯になり、貨

車が足りない状態になったとの記録もあります。筆者にも平野のあちこちに点在したタマネギ小屋の風景が原風景のように今も記憶に残っています。

伝統あるタマネギ生産は海外産の輸入や高齢化のために縮小しましたが、この再生事業では価格競争に巻き込まれない有機タマネギを新規就農者が生産することで活路を開きます。

この日、20人の学生らはひたすらに泥とごみと格闘。農業はきれい事ではないことを実感しました。そして、農地の隅に生え残っていた大根を引き抜くと泥のままかじり「あまーい、おいしい」と叫びました。一日の格闘の中で農作業の汚さ、重さ、つらさ、理不尽さ、



パイプハウスの基礎を掘り出す



荒れた農地の整備

荒れた農地の整備。そしてみずみずしいおいしさを味わったのです。

現在の農業問題は、現状を憂う論者ばかりが多くなるとし、農業の当事者にならうとしないことにあります。学生が駆り出されること多い収穫体験や商品開発は農業の見掛けにすぎず、華やかな果実になるまでの下ごしらえの苦労こそが当事者の原点です。

この授業は夏まで続きます。学生が社会に出て、消費の側や政策の側からでも農業の「当事者」になるための始めの一步を提供する実習でありたいと考えています。

プロ フィル



湯崎真梨子 (ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。